

女の勲章

2008(平成20)年1月20日鑑賞(千日前国際シネマ)

★★★



監督＝吉村公三郎／原作＝山崎豊子／脚色＝新藤兼人／出演＝京マチ子／若尾文子／叶順子
／中村玉緒／田宮二郎／森雅之／内藤武敏(角川映画配給／1961年日本映画／110分)

第3章

内容の面白さは男女を問わず

……京マチ子扮する船場のいとはんが「女の勲章」を手に入れるのに絶大な力をふるったのが、田宮二郎扮する事業欲に燃える男、銀四郎だが、さて彼の狙いは……？ 面白いのは、若尾文子、叶順子、中村玉緒が演ずる3人の内弟子たちと銀四郎の間で展開される色と欲の展開模様。良くも悪くも昭和の高度経済成長はこんな姿だったと思うと、新鮮な気持も……。もっとも、いとはんが選択した究極の結論の説得力はイマイチ……？

なぜ今、「京マチ子名作映画まつり」が……？

大阪ミナミは芸能文化発祥の地として有名だが、近時シネコンが進出する中、昨年には道頓堀にあった道頓堀東映と道頓堀東映パラス、道頓堀角座1、2が相次いで廃館となったが、千日前通りにある千日前シネマと千日前国際シネマは何とかまだ健在。しかし、その存続は時間の問題と私には思っていたが、今般、「昔と同じスタイルで名画をノスタルジックに楽しみたい」との思いによって「千日前シネマ倶楽部」を発足させたとのこと。さて、その効用は……？

その「千日前シネマ倶楽部」が放った第1弾が、ミナミに縁のある京マチ子を特集した「京マチ子名作映画まつり」。そこで私は、早速その中の1つ『女の勲章』を鑑賞することに。

魚崎から甲子園へ、さらに大阪、東京へ……

この映画で京マチ子が扮する主人公は、船場のいとはん育ちの大庭式子。魚崎の自宅で立ちあげた洋裁教室は次第に生徒が増え、今日は甲子園に聖和服飾学院を開校す

る日。式子は3人の内弟子、津川倫子（若尾文子）、坪田かつ美（叶順子）、大木富枝（中村玉緒）を従えて、晴れの開校式に向けて忙しい日々を送っていた。

そんな中、いかにも甲斐甲斐しく式子に仕えている大阪弁丸出しの男が八代銀四郎（田宮二郎）だ。彼は大学を出た布地問屋の息子だが、聖和服飾学院の成長戦略を練り、実行していく中で自分の野望を実現していこうと考えている野心家。しかし、式子はそのまで気づかず、經理のことや経営のことは全面的に銀四郎を信賴していた。その結果、式子は今甲子園校を開校することになったが、その後大阪校の開校へ、さらには東京に進出するまでに。

この映画は、そんな船場のいとはん式子が「女の勲章」を手に入れていく過程と、「男の野望」との葛藤の中それが崩壊していく過程をスリリングに描いた人間ドラマ。高度経済成長時代に入ろうとしている時代状況の中でみえる登場人物たちの欲や人間臭さは実に面白く、見ごたえ十分。そのうえ、スクリーン上に登場する俳優たちも若き日のカッコいい美男美女ばかり……？ 半世紀近く前の映画でも、こんな新鮮味があることにビックリ。

こんな役もピッタリ！

田宮二郎は勝新太郎との『悪名』シリーズでの名コンビや『クイズタイムショック』の司会等で有名だが、シリアスな演技の代表作は何といっても『白い巨塔』（66年）。こんな田宮二郎は、「永田ラッパ」と呼ばれた大映の永田雅一社長との間の宣伝ポスターの名前の序列をめぐる争いや43歳の若さでの猟銃による自殺でも有名だが、彼が演技で注目を集めたのが1961年の『女の勲章』らしく、その直後『悪名』シリーズがスタートすることに。

『女の勲章』での銀四郎役は、『悪名』シリーズでの「モートルの貞」や「清次」役とも共通する軽妙な大阪弁をあやつる面白いキャラだが、決して軽薄ではなく逆にすべて計算されたクールなもの。『女の勲章』は京マチ子を主役にすえた映画だが、式子をはじめとして倫子、かつ美、富枝の3人の女たちと次々と肉体関係をもち、そのすべてをバランスよく保ちながら事業を拡大していく銀四郎の手法はそりゃすばらしいもの。したがって、どちらかという、銀四郎を演ずる田宮二郎が主役の座を奪っているような印象を受けるほど、彼の演技は絶妙。まさにこんな役もピッタリと、彼の天才ぶりに感心。

したたかな女 その1——倫子

この映画では、式子以外の3人の女たちはそれぞれにしたたか。まず第1は、式子が銀四郎を重宝していることに露骨に反発している倫子。しかし、たまたま倫子は、三和繊維会社の宣伝部員野本敬太（内藤武敏）とつき合っていたことをチャンスとして、自分の価値をより高めようとした小細工が銀四郎に見破られたため、たちまち苦境に立つことに。

しかし、ここでトコトン倫子を追いつめることなく、逆に「俺と組んだ方が得だよ」と迫ったところが銀四郎のすごいところ。すなわち、銀四郎は倫子に対して大阪校を開校すれば甲子園校は倫子にまかせると宣言したのだった。他方、倫子のすごいところは、ここで野本と銀四郎を天秤にかけたこと。するとその結果はおのずと明らか……？

仕事に生きようとする女が男を選ぶについて、どのような優先順位を立てるべきか、時代状況は大きく異なるとはいえ、きっとあなたの参考になるのでは……？

したたかな女 その2——富枝

大阪校のあと京都進出を実現し、その責任者にしたのがかつ美だが、このお話は省略し、最高に面白い女富枝を紹介しよう。今やバラエティー番組でひっぱりだことなっているのが、勝新太郎の妻中村玉緒だが、このおばさん、若い時はものすごいベッピン！

それはともかく、3人の中で最もおとなしそうでおっとりしているように見えていたこの富枝が、実は一番やり手だったよう。ホテルの部屋に忍んできた銀四郎をみると、「とうとう今度は私ですか？」と語りかけ、「どんな条件提示か」と迫るビジネスライクぶりには、さすがの銀四郎もビックリ。さらに男女関係は一夜だけと割り切っていたらしく、「次はいつ会えまっか？」と聞いてくる銀四郎に対して、「次はおまへん」とピシャリと答えたところはカッコいいもの。

まあ、この富枝くらい客観的状況をすべて理解したうえで男女の欲と事業の欲を満たすことができれば、スムーズでいいのでは……？ ところが、いとはん育ちの式子には、銀四郎のそんな男女観はトンと理解できなかつたらしい。そのため、映画後半はいろいろとややこしい問題が……。

やっぱり銀四郎より大学教授の方が……

式子が聖和服飾学院の対外的な信用を得るために理事に就任してもらったのが、銀四郎の大学時代の恩師白石教授だが、これが森雅之演ずるだけあってクールでいい男。しかも、別れた奥さんとの間にはいわく因縁があるらしい。そんな秘密っぽい雰囲気や苦悩を抱えて1人生きる男の姿は、逆に式子のような男を知らないお嬢さんにはカッコいいもの……？ てなわけで、式子は銀四郎とは正反対の白石教授に次第に惹かれていったらしい。

そんな中、聖和服飾学院は遂にフランスへの進出を果たしたが、式子はそこでフランスの学会に出席していた白石教授の協力を受ける中、ついに男女の仲になることに。こうなると2人の決断は早く、50歳を超えた白石教授と36歳の式子はすぐに結婚することを決め、これを銀四郎に報告したが、そこでの銀四郎の対応は……？

やっぱり、式子には銀四郎より白石教授の方が向いていることは明らかだが、今や銀四郎は事業上のパートナーとして密接な利害関係が絡まった。そこで式子が「甲子園校以外は全部あげる」と言っても、銀四郎は「担保のついている不動産などもらっても無意味。それならば手切れ金を……」ときたから、式子も大変……。

式子の究極の選択は……？

白石教授との結婚によって両立しなくなるのは、銀四郎との男女関係だけで、事業経営のパートナーシップには何ら影響しないはず。また、銀四郎だって、別に式子の肉体的魅力にゾッコン参っているわけではないから、その部分だけを解消すればいいだけ。

私はそう思ったのだが、学究肌で潔癖な白石教授はそうではなく、別の結論を下したらしい。それは、銀四郎と手を切るための条件を提示し交渉している式子を見て、住む世界が違ふと感じ、やはり別れようというきわめて冷たいもの。「そりゃないよ、白石先生」と私は思ったが、そんな絶望的(?)な状況の中、式子が下した究極の選択とは……？

この結末には賛否両論があるはず。そして、私は少し説得力不足と感じてしまったが……？

2008(平成20)年1月22日記